

「2023年度インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学農学部2年 山本 大地

他国での研修というのはとかく自国との差異を考えがちである。インドネシアと日本は同じアジア太平洋地域に属するとはいえ、さまざまな点で相違を見つげられる。料理、服飾、言語、音楽といった文化的なものから、地理、生物相、気候などの自然科学的なものまで。しかし、これらの差異は旅行や短時間の滞在でも実感するし、相応の知識を持ってすれば自明でもある。今回の2週間にわたる現地学生との交流からはむしろ、二国間の同質性に気づいた。

インドネシアは一般に発展途上国といわれてきたが、一人当たりGNIは4580ドル(2023年)と上位中所得国に入ってきている。しかし貧富の差は都市内でも地域間でも大きい。その中でインドネシア大(以下UI)に通う学生は明らかに高所得者層に属する家庭に生まれ、また彼らも次の高所得者層を形成していく。これは京大にも概ね同じことがいえる。UIの校舎はヴァナキュラー建築を取り入れているが、中で行われる授業での習得事項は、少なくとも学部レベルでは、日本と相違ない。

設けられている学部も日本と同じで、数理系は院進する傾向にあるのも似ている。そして彼/彼女らは一流企業や国に就職し、日本と同じようなホワイトワーカーになるという。このように、UIでの学生生活は私が想像していたよりずっと日本のそれと似ているのだ。

ではここから何を考えるか。

まず世界の均一化は高所得、高学歴層でより早く進んでいる。しかもそれは西欧に倣ったものである。一方で冒頭で紹介したような差異は日常に則したもので、こうした伝統的な特色は地方に残存しやすく往々にしてその担い手は中間から低所得層である。政治、経済、学術のエリートたちの間では西欧化が進む一方で、民衆には伝統文化が色づく。快適な一方で異文化を体験したいという観光客にはそれで好都合かもしれないが、この階級に伴った文化の違いは必ずやひずみをもたらすだろう。現にインドネシアはそのズレに発端を持つパプア州の独立運動や、首都移転と自然破壊などの大きな問題を抱えている。そしてこれはインドネシアだけでなく世界の大部分を占める地域で見られる問題である。

以上が今回のプログラムを通しての私の感想と思考である。これからもこの同質化とそれによる軋轢を日本を含めたさまざまな地域を例にとって考えていければと思う。